

あんげろす

「賀川豊彦研究センター」の夢

永野茂洋

全国に賀川豊彦の事業を研究、顕彰する記念館が5つある。東京上北沢の「賀川豊彦記念松沢資料館」、関東大震災時に賀川豊彦が拠点として活動し、日本最初のボランティア発祥の地とも言われる「本所賀川豊彦記念館」、1908年のクリスマスイブに入居した賀川豊彦・ハル夫妻が14年間をすごした神戸葺合新川の「賀川記念館」、生活協同組合発祥の地神戸の「コープこうべ協同学苑資料館」、そして賀川豊彦の出身地である徳島の「鳴門市賀川豊彦記念館」の5つである。

そこにもう一つ、国外の記念館として、韓国大邱大学の「賀川豊彦記念館」を加えれば、身近な所に6つの記念館・研究機関を持つことになる。大邱大学は、賀川豊彦と親交のあった李永植牧師がはじめた社会事業学校を前身とする、福祉で有名な総合大学で、韓国一の広大なキャンパス（世田谷区と同じ面積）を誇る。その一角に「賀川豊彦記念栄光教会」と「賀川豊彦資料館」がある。

明治学院大学にも、将来、7つ目の研究機関となる「賀川豊彦研究センター」ができる日を夢見たいと思う。



佐藤飛文

2011年12月24日、明治学院東村山高校有志ボランティア・チーム第5陣の生徒たちが、宮城県石巻市の仮設住宅にクリスマスケーキを届けた。その時に出会った方から、「住んでいた集合住宅がもうすぐ取り壊されるんだけど、その前に息子の卒業アルバムを一緒に探してほしい」という依頼をいただいた。そこで2012年3月の第6陣で、石巻市南浜町の津波被災家屋で被災家財の整理作業をした。息子さんの卒業アルバムや卒業証書、お母さんの婚約指輪など、たくさんの思い出を見つけ出し、無事に届けることができた。



(2012年3月、卒業アルバムを探す)

これでめでたしめでたし、と思ったのだが、実はそうではなかった。同年春に保育園を卒園し、仮設住宅の近くの小学校に入学した、娘のAちゃんが不登校になってしまったのだ。地震の時の恐怖や、津波で自分の家が全壊して住めなくなってしまったことなどがトラウマになっていて、ちょっと大きな余震がおきたり、テレビで津波の映像を見たりすると、フラッシュバックが起きてしまうのだという。あの時の恐怖を思い出してしまうと、お母さんのそばを離れようとせず、仮設住宅の狭い部屋に引きこもってしまったのだ。

悩んだお母さんは地元のボランティア団体と相談し、毎週土曜・日曜に仮設住宅の集会室を開放して、

子どもたちが自由に遊べるスペースを作った。私達のチームも長期休みのたびにこの仮設住宅を訪ねた。冬にはクリスマス会を開き、春には進級お祝い会を開き、夏には子ども夏祭りを開いて、Aちゃんたちと遊んだ。最初は人見知りをしていてAちゃんだったが、高校生たちといっしょにチョコフォンデュや流し素麺をしたり、スーパーボールすくいやヨーヨー釣りをしたり、エッグハントや何でもバスケットなどしているうちに、だんだん笑顔になっていった。「今度はいつ来てくれるの?」と高校生たちがボランティアに来てくれるのを楽しみにしてくれるようになり、「今年の夏は素麺だけじゃなくて、ミニトマトやブドウも流そうよ!」と、流す食材をリクエストするようになった。

私達がボランティアに来ると、Aちゃんは私達と一緒に食材を切ったり、ホットケーキを焼いたり、素麺を流したり、ヨーヨーを作ったり、いろいろな作業を手伝ってくれるようになった。休みがちだが小学校にも通えるようになり、今年の3月に第24陣が子ども会を開いた時は、クラスメイトをたくさん誘って来てくれた。「地震の日の夜はね、1個のおにぎりをみんなで分け合って食べたんだよ。のどがかわいたけど飲み水がなかったから、雪を口の中で溶かして飲んだんだよ」と、震災当時のことも語れるようになってきた。

今年の7月にも第25陣が子ども会を開いた。Aちゃんは小学校の鼓笛隊に入って、石巻川開き祭りに向けた練習を頑張ってるんだと話していた。そして今年の12月に復興住宅に入居する予定だという。もうこの仮設住宅で一緒に遊ぶことが出来ないという寂しさはあったが、5年以上に及ぶ避難生活がやっと終わり、復興住宅でクリスマスを迎えることが出来ることを共に喜び、再会を約束してAちゃんと別れた。

明治学院東村山高校有志ボランティア・チームは、2015年12月から茨城県常総市の水害被災地でも活動している。ボランティア活動を通して出会った常総市水害被害者の会のSさんは、全壊認定された平屋の3DKのうち、6畳の一室のみを改修して暮らしている。

今年の1月にSさんは次のような詩を書いて、自身の
苦しみを訴えた。

私にカレーライス

M・S

お風呂を沸かし 入れます。
料理を始めました。でも
カレーライスができません。
濃い緑茶も入れられなくて・・・
部屋の中を埋め尽くした 泥の色
埋め尽くされた 焦げ茶色が
いやなんです 元気な私が死にました
なぜか できないんです。
9月10日の前に 普通の私に
返して下さい 戻して下さい
思い出も 何もかも 失くなりました
楽しかった日々も 幸福も
私の全てを 返して下さい
普通の暮らしを 返して下さい
カレーライスを 作れるように
おいしい緑茶を 入れられますように
元の私に 戻して下さい
いつもの日々を 返して下さい
それだけで いいんです。
被害後4ヶ月

常総市水害から1年以上が経ったが、Sさんは未だ
にカレーライスを作れずにいるという。水害の傷はまだ癒えていない。

震災や水害で被災された方々が希望を持ってクリスマスを迎えられることを祈りながら、来年も生徒たちと一緒に被災地に行きたいと思う。ボランティアは微力ではあるが、無力ではないことを信じて…。

さとう・たかふみ（協力研究員）

過去の人と出会う

辻 直人

歴史研究にとって最も大事なものは史料との出会いであることは言うまでもない。近年は史料のデジタル化も進み、わざわざ現地に出かけなくてもパソコンの画面上で内容を確認できる機会も増えた。しかし、史料との出会いの意味は、単にその文書に書かれたことを情報として仕入れたら終わりではない。現地に行かなければ分からないことが必ずある。特に感覚的な部分は、インターネットでは絶対に伝わらない。

例えば、冬のミネアポリスは耳が切れそうなほどの寒さであったとか、車体をきしませながら街の高架線路を走るシカゴの電車は夜中でも騒々しいといったことは、現地にいなければ絶対に分からない。そうした感覚的に捕らえられる部分も、その土地の構成要素である。また、1つの史料を読む上で、その書き手がどのような環境の中で書いていたのか、どのような空気を吸っていたのか、何を感覚的にとらえていたのかを読み手も感じながら読むことで、史料の理解は格段に深まるし、その内容がより身近になる。

史料調査での最大の楽しみは、一次史料との出会いであろう。中でも、その時代の人物が書いた直筆の文書を見つけた時は、まるで宝物を見つけたかのような気持ちになるし、過去の人物と対面したような錯覚にも陥る。最近の大きな出会いは、6月にキリ研の研究会でも発表させていただいた成瀬仁蔵の新史料だ。今年の3月、まだ雪の残るシカゴ大学を訪問した。成瀬の史料と出会うことは全く意図していなかった。別の研究目的で史料調査を訪れていたのだが、日本に関係する史料もいくつか見つけたので、それこそ来たついでにどんな史料か見ておこうと思った程度だったのである。史料フォルダは「日本女子大学」となっていた。いくつかのアジアの大学の名前が付いたフォルダ群の1つだった。新約聖書学のアーネスト・バートン教授はアジアとも関わりが深い人物なので、恐らく

アジアの教育事情を調べたのだろうと推測しつつも、1度中身を確認しようと請求してみた。出てきたものは、実は日本女子大学に直接関係するものではなく、成瀬がバートンに個人的に送った書簡などであった。

1912年、成瀬は渋沢栄一らと東西の宗教、倫理、思想を統一する目的で「帰一協会」を結成した。その成瀬が、同年帰一思想をアメリカ人にも紹介し広めるために渡米した際、バートンにも面会を求めている。成瀬の思想に共感したバートンはその後、東海岸の学者たちに成瀬を紹介する手紙を送ったことが、その史料から分かったのである。これまで、帰一協会とバートンとの関係は一切知られていなかったのに、今回見つけた史料は米国帰一協会が結成される過程を知る重要な発見となった。

フォルダに含まれていた成瀬直筆の書簡を見た時は、その英文の力強さに圧倒され、アメリカ人に帰一協会、帰一思想のことを伝えたいという熱意を強く感じた。まるで成瀬がそこにおいて直接私に語りかけているようであった。少なくとも成瀬はその便せんを目の前にして思いを込めて綴っていたのであり、時空を超えて歴史上の人物に出会えたと感じた瞬間だった。これぞ歴史研究の醍醐味ではないか。

成瀬新史料を紹介したキリ研究会の様子はクリスチャン新聞やクリスチャン・トゥデイでも大きく取り上げていただき、さっそく日本女子大学や帰一協会の研究会をしている渋沢栄一財団にも注目していただいた。史料との出会いが更なる研究の展開を生み出すとは思っても寄らなかった。

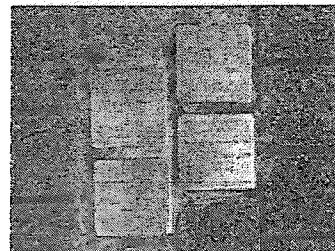
もう1つ海外史料調査で印象に残ったことを書き記したい。今年の8月に、ドイツに史料調査に行った時のことである。そこで私は初めて「つまづきの石」の存在を知った。今、ドイツを中心に「つまづきの石」という記念プレートを道に埋め込む活動が行われている。これは、ナチスによって強制収容されたユダヤ人を記憶し続けるため、その街に住んでいたユダヤ人の名前やその後の人生を記して真鍮のプレートを埋

める活動のことである。今回訪問したハイデルベルクやフランクフルトでも、何方所かで見つけることができた。「つまづきの石」はユダヤ人が住んでいた建物の入り口に埋められている。

例えば、ハイデルベルクで見つけたもの(写真参照)は、4つのうち2人の人(恐らく夫婦)がアウシュヴィッツに送られ殺害されたことが記されていた。子どもだった2人はイギリスにどうにか逃げられたようであった。一見美しい町並みも、こうした悲しい歴史を抱えていた。その石を見ながら、その建物から76年前にユダヤ人が連行された光景を想像しただけでも、胸が締め付けられた。しかしそれを忘れないでいようとするその取り組みを知って、街をより深く知ることができた気がした。悲しい辛い過去でも忘れないで記憶し続けること、「心に刻む」精神がドイツに生きていることを実感した。

また改めて、日本はどうも加害の歴史を語ろうとはしないのではないか、と思わされた。その点、ドイツは実にはっきりとナチスのしたことを記憶として街にも多くのモニュメントを残している。そうしたモニュメントを残すことにはドイツ国内にも色々な葛藤や対立があったようだが、根本的に過去の過ちに対して真摯に反省している姿に、日本も学ぶことが多いと確信した。

時間と場所を越えて過去の人と出会うことが史料調査であるならば、歴史研究者として、その出会いから感じ知り得たことを伝えることが務めではないだろうか。



つまづきの石

つじ・なおと(協力研究員)

高橋 一

いま多くのキリスト教学校やプロテスタント教会で用いられている『新共同訳聖書』が翻訳刊行されたさいの「旧約聖書」編の最終責任者の一人であったのは、故・左近 淑（さこん きよし）先生であった。左近先生は、私も神学校時代に教えを受けた先生の一入である。東京神学大学の学長であったとき、この『新共同訳聖書』の翻訳最終責任者としてのお疲れもあったのではないかと思うが、急性クモ膜下出血で突如天に召されたのである。まだ60歳になっておられなかった。東京神学大学礼拝堂での葬儀に、先に100歳で亡くなった三笠宮崇仁氏が参列されていたことが印象深い。旧約聖書学や古代オリヱント学をとおして交わりがあったのであろう。『左近 淑著作集』がお弟子さんたちの手によって教文館から刊行され完結している。

その左近先生が、若き日に新教出版社から刊行した『詩篇研究』という書物の序文の中で、「釈義」についてこう語っている。この「釈義」という言葉だが、これはいかにも神学用語だ。『広辞苑』にも出てこない。この言葉は、「説教」を語るものが、聖書から受け止めるメッセージを分析・解釈して瞑想し、「説教」に向けて言語化するための準備作業とみなしてもいいであろう。左近先生は、ご自身の神学生時代を振り返って、この「釈義」に触れてこう記している。

「釈義ということで私（左近）の念頭にあるのは、（当時、東京神学大学で新約聖書学を担当されていた）故・小塩 力（おしお つとむ）先生の言葉である（ちなみに、昔NHKドイツ語講座で長く講師をされたドイツ文学者・小塩 節（おしお たかし）氏はその子息である）。ある年、小塩 力先生は神学校での新約聖書

の釈義の授業で、ルカによる福音書24章から「エマオ途上の物語」を読まれた。」

これは周知のように、復活した主イエスと道で出会った弟子たちが、イエスとはわからずに歩きながらずっとイエスから聖書の説き明かしを聞いた後、夕食時に卒然との方がイエスであることを知る、ルカ福音書の最後に出てくる物語である。左近先生の言葉を続けて聞こう。

「彼らは互いに言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明かして下さったとき、お互いの心が内に燃えたではないか」。小塩先生は「釈義とは」と言われた、「釈義とは聖書を説き明かすことにより、心が内に燃えることである・・・」とじゅんじゅんと説いて終わった。」

私はこの言葉に触れて以来、聖書に基づいた「説教」を語ろうとすると、また、「キリスト教学」に関する言葉を「講義」で語ろうとすると、いつもこの言葉を思い出すのである。「お互いの心が内に燃えたではないか」（口語訳聖書）。文語訳聖書ではこうなっている。「われらが心、うちに燃えしならずや」「説教」とは、人が聖書の言葉に触れて「心が燃え立たしめられる」ことだ。願わくは少しでもそういう「説教」でありたい、と思うのである。

「説教」とめぐるもう一つのエピソードは、これも長く東京神学大学で「教義学」という講義を担当された熊野義孝（くまの よしたか）氏が私の友人に語ったエピソードである。熊野氏は、日本のプロテスタント・キリスト教の初期の教会指導者であった植村正久（うへむら まさひさ）牧師に直接親しく教えを受けた神学者でもあった。東京の武蔵野教会を夫人の熊野清子（くまの きよこ）牧師とともに開拓伝道され、長い間「牧会」された。私の友人は、学生時代にこの

教会で信仰を与えられ、いったん郷里に帰って仕事をした後、牧師となるべく再び東京に戻り、最後は神学生として熊野義孝氏の最晩年のお世話をしていた。そこでくつろいだ普段着の熊野先生から、日本のキリスト教史に残るようなたくさんの人びとの楽しい思い出話しや神学上のエピソードを聞いていたのである。中には今も存命中の著名な神学者への辛口の寸評もあったようである。いわば、熊野氏の「卓上語録」のようなものであった。それを東京神学大学の寮に帰って来てから、わたしに最初から終わりまでおもしろく聞かせてくれたのである。

その中でとりわけ印象に残っているのが、「説教」に言及した熊野氏の言葉である。熊野牧師はこう言った。「説教は、それを聞き終わったとき、その説教によって語られた聖書の言葉が、それがたとえ今までどんなに聞き慣れていた聖書の言葉であったとしても、まるではじめて聞く聖書の言葉であるかのような新鮮な輝きを持ってよみがえってくることだ」と。

またこうも言ったという。「説教は、教会の礼拝で聞き終えて家に帰ってから、もう一度今度は一人での聖書の箇所を開いて読み返してみようと思うようにさせられることだ」と。

実際に熊野氏の「説教」がそのとおりであったのかどうかは判然としない(笑)。ただ少なくとも熊野氏は、そのような「説教」を語ることを目指していたのであろう。あるいは恩師の植村正久牧師の「説教」の言葉を思い出していたのかもしれない。

「説教」は、「お説教」ではない。「説教」にたいして、ときどきその頭(あたま)に、丁寧な気持ちをこめる接頭辞の「お」を付けて、「お説教」と呼ぶ人がいる。「今日のお説教はとても心に残りました」とか、「今日のお説教はむずかしゅうございました」(何が

何だかチンプンカンプンでした、という意味の婉曲表現?)など、耳にしたこともあるだろう。主観的には「説教」に敬意を表してそう呼ぶのだと思う。

しかしある人が言った。「何でもかんでも「お」を付ければその価値が上がるというものではない。「説教」と「お説教」は、「ニギリ」と「オニギリ」ほど違う!」、と。

「説教」の言葉がどうしたら「生きた言葉」になるのか。その課題は、「キリスト教学」の「講義」の言葉にも向けられている講義担当者への課題でもあるのではないだろうか。(了)



熊野義孝、清子牧師夫妻

(日本キリスト教団武蔵野教会ホームページ：
<http://www.musashino-church.jp/images/ph051.jpg>)

たかはし・はじめ(協力研究員)

植木 献

先日、柏木義円の研究会に出席した。その際に、明治期に安中を中心とする群馬県に柏木義円や湯浅治郎など今日の視点から見ても先進的な視点を持った人物がなぜいたのかについて議論になった。

彼らが展開した廃娯運動、平和主義、天皇制批判、組合教会の朝鮮伝道批判などの議論は、国家主義の圧力の下で主戦論になびき、キリスト教は忠孝倫理や愛国心と矛盾しないとの弁明に終始した大勢のキリスト教指導者にはなかったものである。

国家主義が席卷していくなか、地方教会が拠点となってこうした発信力を持ち得たのは、新興産業として日本の外貨獲得に貢献していた製糸業との繋がりが大きいことはしばしば指摘される。西洋文明の入口としての横浜と直結し、人、物、情報の集積があったからである。それが新しい文化と運動の推進装置になった。

キリスト教が魅力を持った新しい産業と手を携えて広がるのが伝道の一つの可能性だとすれば、今日連携できる産業は何だろうか。研究会からの帰途、ずっとそのことを考えていた。社会学的にみれば、ウェーバー以来プロテスタント諸派は近代資本主義との関わりが指摘されてきているから、業種を問わず親和性があるとも言える。

けれどもその後の製糸業の衰退と共にキリスト教が勢いを失っていった歴史から学ぶべきなのは、次の成長可能性のある新興産業に素早く飛びつくことよりも、私たちの日常生活の枠組みとなる文明や国家などの社会システムのほころびから生じる人間の痛みへの注目とその解決のための新たな枠組みとの連携を模索することだろう。

私たちにそうした問題意識があって初めて、柏木義円や湯浅治郎のはたらきの意義が明確になるのでは

ないか。今後の50年、100年にキリスト教と最も親和性のある枠組みは何なのか改めて考えていきたい。

うえき・けん(主任)



研究所活動 (2016年7~12月)

キリスト教研究所1日研究会

開催日時: 2016年7月23日(土)15:00-

開催場所: 明治学院大学白金校舎本館92会議室

発表①

「1922年の非基督教運動に対する教会の対応——
広州の『真光雑誌』を中心に」

発表者: 朱海燕(客員研究員)

コメント: 渡辺祐子(教養教育センター教授、所員)

発表②

「平和と和解の神学に向けて—フィリピン宗教宣撫
班員と戦犯とされた—キリスト者の事例から考える
赦しと和解の諸相」

発表者: 豊川慎(客員研究員)

コメント: 植木献(教養教育センター准教授、主任)

懇親会

開催日時: 2016年7月23日(土)18:00-

開催場所: カサ・デ・フジモリ 目黒店

白金文学文化研究プロジェクト公開研究会

「レクチャーコンサート アイリッシュ・ハーブの歴史と音楽」

開催日時: 2016年10月1日(土)14:00-16:00(開場
13:30)

開催場所: 明治学院大学白金校舎アートホール

講師: 寺本圭佑(アイリッシュ・ハーブ奏者、研究者、
教師、製作者)

キリスト教研究所公開講演会

「アジアとアフリカのキリスト教比較研究」

開催日時: 2016年10月25日(火)17:30-19:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

講師: クラウス・コショルケ(ミュンヘン大学福音主義
神学部教会史講座名誉教授)

通訳: 高井ヘラー由紀(明治学院大学非常勤講師、キ
リスト教研究所協力研究員)

賀川豊彦研究プロジェクト共催

「第二回シンポジウム

助け合いの心が日本社会を変える!

市民社会と賀川豊彦の友愛精神」

開催日時: 2016年10月29日(土)14:00-16:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎2号館2101教室

パネラー: 逢見直人(日本労働組合総連合会事務局長)、
比嘉政浩(全国農業協同組合中央会専務理事)、
新井ちとせ(日本生活協同組合連合会副会長)、
篠田徹(早稲田大学社会科学総合学術院教授)

コーディネーター: 稲垣久和(東京基督教大学大学院
教授)

東アジア戦後キリスト教史研究プロジェクト公開研
究会

「現代中国はどこに向かっているのか —キリスト
者の考察」

開催日時: 2016年11月16日(水)16:00-18:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

講師: 何光瀟氏(中国 人民大学教授)

通訳: 李剣峰氏(同志社大学)

キリスト教研究所後援公開講演会

第37回 賀川豊彦記念講演会

「民主主義の帝王学 —日本の未来を考える—」

開催日時: 2016年11月19日(土)14:00-16:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎2号館2101教室

講師: 阪田雅裕(弁護士、元内閣法制局長官)

明治学院大学教養教育センター附属研究所・キリスト
教研究所共催公開講演会

「王金河医師と台湾の風土病「烏脚病」」

開催日時: 2016年11月22日(火)15:00-16:30

開催場所: 明治学院大学白金校舎10階大会議室

講師: 王鳳群(王金河文化芸術基金会理事長、王金河
氏ご子息)

戦後の宣教師研究プロジェクト研究会

第4回

開催日時：2016年9月15日(木)13:00-

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

第5回

開催日時：2016年10月6日(木)13:00-

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

第6回

開催日時：2016年11月30日(水)13:30-

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

新着図書

- ・『説教黙想 アレテイア』No. 93、日本基督教団出版局、2016
- ・『説教黙想 アレテイア』No. 94、日本基督教団出版局、2016
- ・『福音と世界』No. 8、新教出版、2016
- ・『福音と世界』No. 9、新教出版、2016
- ・『福音と世界』No. 10、新教出版、2016
- ・『福音と世界』No. 11、新教出版、2016
- ・『福音と世界』No. 12、新教出版、2016



あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第71号

2016年12月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214

Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩